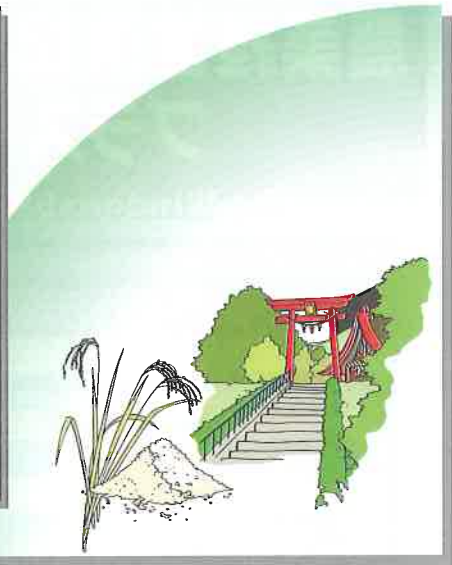


祈りの大地 第六回



伊勢神宮で生まれた「穀の種」

宗教ジャーナリスト 齋藤吉久

さいとう・よしひさ
昭和31(1956)年生まれ。弘前大学、学習院大学を卒業後、総合情報誌「選択」編集記者などを経て、現在、宗教ジャーナリスト。雑誌「正論」(産経新聞社)11年4月号に「朝鮮を愛した神道思想家の知られざる軌跡」、10月号に「井上ひさし『東京セブンローズ』が書かない『美しき国語』の歴史」を執筆。宗教専門誌「神社新報」に「食と日本人」を長期連載中。共著に「国玉誕生」(神社新報社刊)。



先月中旬、伊勢神宮では一年でもっとも重要な新嘗祭(かなめさい)がおこなわれた。三日間にわたって、外宮、内宮の順にそれぞれ夕刻と深夜の二回、今年、神田でとれた新穀の大御饌(おおみけ)が供えられる。最終日には天皇が皇居内の水田でお育てになった稲の初穂が懸税(かけちから)として捧げられ、勅使(天皇の使者)が両宮に幣帛(へいはく)を奉った。それにしても、なぜ稲を捧げるのだろう。「日本書紀」には天照大神が保食神(うけもちのかみ)から「命の糧」である五穀の種子を与えられた、と書かれている。

これが新嘗祭の起源で、垂仁天皇の皇女倭姫命(やまとひめのみこと)が伊勢国を巡幸されたとき、鶴がくわえていた霊稲を大神に捧げたのが祭りの最初とされる。

新嘗祭からひと月後、全国津々浦々にいたるまで稲穂が成熟するころ、今度は宮中で皇室第一の重儀である新嘗祭(いになめさい)がおこなわれる。いまは「勤労感謝の日」とよばれている十一月二十三日の夕刻から深夜(翌日)にかけて、二回、天皇が育てられた稲と、各県から献上された米と粟の新穀の御饌と御酒(みき)が皇祖神以下天神地祇に捧げられ、天皇御自身も召し上がるのである。

新嘗祭の起源も記紀神話に求められる。「日本書紀」には、天孫降臨に際して天照大神が「高天原にある斎庭(ゆにわ)の稲穂をわが子に与えなさい」と命じられた、と書いてある。天孫降臨はわが国の稲作の

始まりでもあり、新嘗祭はこの神勅に基づいた国家と国民の統合を象徴する神人共食の食儀礼とされている。そして「御神米」イセヒカリは斎庭の稲穂の神勅さながらに、大神をまつる神宮の神田で生まれた。日本の稲作農業が危機のまっただ中にあるこの現代に於いて、伊勢の大神は稲作の民である日本民族にいったい何を語りかけようとしているのか。

この原稿を書いているとき、埼玉県秩父市の石原儀助さんからイセヒカリの新米十キロが届いた。宅配便の伝票には「御神饌イセヒカリ」とある。石原さんは「神様にお仕えるつもり」で、もう三年もこの米を作っている。どこまでも光り輝く神々しいお米を家族でありがたく頂戴した。最後に最新情報をひとつ。来年から関西の種屋さんがイセヒカリの種子生産・販売を始める。年末には正式発表の予定とか。

九月下旬、台風十八号が山口県を襲った。元山口県農業試験場長の岩瀬平氏からお電話をいただいたのは台風一過の翌日である。「山口市内のコシヒカリはすっかり倒伏して、農家は『収穫もしたくない。もう作りたくない』と怒っている。ところがイセヒカリは、まあ涼しい顔で立っちよる。」電話の向こうで岩瀬さんが笑っている。

イセヒカリという稲を、ご存知だろうか。伊勢神宮で生まれた新種の稲である。平成元年の秋、伊勢地方は立て続けに二度も台風に見舞われ、神田のコシヒカリは見るも無惨なほどべったりと倒伏したのだが、そのなかに悠然と直立する稲株があった。その後、神田の管理責任者森普氏(当時)や山口の篤農家の手で試験栽培が続けられた結果、「施肥を抑え気味にすれば味はコシヒカリをしのぎ、多肥栽培すれば反収七百キロが実現できる。単稈で絶対に倒れない。病害虫にも強い。細かい設計がいらず、作

りやすい」(岩瀬氏)ことが判明する。いことづくめの「驚異の稲」である。平成の御代替わりに時を合わせて大神から授かった稲は「皇大神宮御鎮座 三千年」にあたる平成八年、酒井逸雄少宮司によって「イセヒカリ」と命名され、マスコミにも大きくとり上げられた。品種登録がされず、まして奨励品種でないから、原種保存や種子生産に公的機関がいつさえ関与しないという現実のなかで、栽培は各地の神社の神饌田や山口県や関東の精農家を中心にじわじわと広がっている。もちろん神宮の神饌米はいまやすべてイセヒカリである。

ところで伊勢神宮に水田があり、稲が栽培されていることは案外、知られていないかも知れない。皇室の祖神天照大神をまつる神宮で一年三百六十五日、絶えることなくおこなわれる祭りは天皇の祭りであると同時に稲の祭りであり、神饌に米は欠かせない。その稲をつくるのが神田である。



イセヒカリが生まれた伊勢神宮の神田